

冬に咲く花

冬
に
咲
く
花

登場人物

男 1

男 2

※上演時は同じ役者が演じることが望ましい。

佇む男。

男「1月9日。寒い日だ。とても寒い。手袋をしていても、指先が凍える。雪が降りそうだなと思うが、先週も思った。年末年始はずっと曇り空で、クリスマスも降りそうで。だけど、降らなかった。ホワイトクリスマスなんて。・・・ホワイトクリスマスというのは、口に出すとなんて恥ずかしいんだろう。文字で見ると分にはいいのだけれど。音にすると、なにか、偽物みたいで、言葉じゃないみたいに感じる。

今日はいくらか仕事が早く終わった。というか、早めに岐路に付けた。年が明けてからやたらと忙しい。年の初めからみんなよくそんなに働けるものだと思う。大体の人が、こんなことを感じながら仕事をしているんだと思うと、社会の理不尽さを感じないわけでもない。嫌々に仕事をして、しょうがないと自分を丸め込んで、面倒だ面倒だと思いつながら毎日を送る。大概そんなものだ。

楽しいとか、うれしいとか、そんな言葉を仕事に持ち込むのはどうかしていると思う。そんな個人の価値観なんか持ち込んだところで、めんどくさくなるだけだ。自分の感情に乱されるほどめんどくさいことはない。

（やや間。何かを思い出すように）

・・・クリスマス。

そう、クリスマスに。

（思い出した何かを打ち消すように）・・・まあ、いいや。

マンションに到着し、二階へ上がる。日本のマンションはなぜこうも外階段ばかりなのだろう。夏は暑いし、冬は寒い。いいことなんかないのに。

帰宅。

7時25分。僕の方が早かった。食事は僕が作ることにしよう。彼女が戻るのは大抵8時過ぎだ。彼女も、面倒な仕事を面倒な気持ちでこなしている。僕と一緒にだ。

大体多くの人と一緒にだ。そういえば、彼女が僕にとって特別だけれど、同時に特別じゃないと考えることもできる。

彼女とは、なんだ・・・ん、合コンで知り合った。という、なんだかひどく自分がみつともない感じがして嫌なのだが、事実なんだからしょうがない。そのあたりの顛末に関しては省略する。なにしろ、僕は彼女のことを気に入って、彼女も僕のことを気に入って、だから、付き合って、一緒に住むようになった。それだけの

話だ。よくある話で、ありふれ過ぎた話で、何も特別なことなんかない。

（時計を見る）・・・8時を過ぎた。彼女が戻る気配はない。簡単な食事を用意する。夕食はいつも軽めだ。食事に対して僕たちはそこまでの重きを置いていない。と、僕は思っているが、彼女はやたらと一緒に食事をしたがる。

時折、彼女の距離感に僕との決定的なずれを感じる。ケンカになるときはそのズレが原因になることが多い。いわく、一緒に居ることが大切なんだそうだ。

一緒に住んでいるのだから、それだけで最低限の保証はされているはずなのに、何かが不満だというのだろう。そういうことに不満を感じるのが、僕にはよくわからない。それこそ、仕事と同じで面倒なことだ。

年齢的にそういうことを感じやすいのかもしれない。結婚が目に見えてくる年齢だ。（ふと思いついたように）結婚。

・・・クリスマスに。

・・・まあ、いいや。

9時を回る。帰宅の気配はない。どうしたのだろうか。連絡もないし、連絡も取れない。食事は先に食べてしまった。風呂でも入ろうか。

11時になる。まだ帰ってこない。こういうことは年に何度かある。けれど、そういう時は必ず連絡が入る。さて、どうしたものか。

1月10日。日付が変わった。少し眠くなってきた。眠ろうか。もう一時間だけ待つことにしよう。まだ、終電もあることだし。

1時。眠ることにした。明日、どうしたのか聞けばいい。まさか、泊まりになるのだろうか。いや、なんだかんだで彼女は帰ってくる。タクシーでも拾うだろう。きっと残業だったんだろう。けれど、連絡もしないというのはどういうことなのだろう」

部屋が暗くなる。

男「深夜。

物音がした。彼女が帰ってきたようだ。けれど、起き上がって、様子を伺いに行くほどのこともない。どうせ朝には顔を合わせるのだ。その時に理由でも聞けばいい。わざわざ聞くこともないか。僕は、そのまま、眠ることにした」

明るくなる部屋。

男「1月10日。朝。彼女の私物が、まったくなくなっていた。テーブルの上の鉢植え一つ以外、何一つ、なくなっていた。

仕事に出た。休むわけにはいかなかった。だが、丸一日、疑問が頭から離れなかった。

知らぬ間に退勤時間になっていた。

彼女は、どこに行ったのだろう。

部屋の中は、朝出た時と何も変わっていないかった。彼女の私物は何もなく、ただ、リビングのテーブルの上に、見慣れない鉢植えが置いてあるだけだった」

テーブルの上に置かれる、鉢植え。

男「1月15日 毎日が淡々と過ぎていった。彼女のいない日々が一定のテンポで進んだだけ。僕は鉢植えを育てることにした。おそらく彼女が置いていったであろう。いや、そうとしか考えられないのだが。

とにかく、その鉢植えを育てることにした。朝起きると同時に水を与える。それだけだ。なんとなく日当りのよさそうな場所に移動する。それだけだ。

奇妙な鉢植えだった。あまり見たことがない。いや、見たことがない植物だ。

葉が、細い茎から生えている。葉は針葉樹のように妙に尖っており、茂っている。葉のちようど真ん中あたりに蕾がある。ピンポン玉ぐらいの大き目の蕾だ。たった一つしかない蕾はなんだか目玉のようにも見えた」

男、何かを思っ、ただ、黙って鉢植えを見つめる。

男「1月20日 寒い日が続く。当分はまだ冬真っ盛りで、暖かくなるのはずいぶん先の話らしい。鉢植えに水を与える。植物は大きくなってきた。葉がいくぶん伸びた。こんなに寒いのに、成長のスピードが早い。こんなものだろうか。そういう植物もあるだろう。ぐらいにしか思わない。こんなことをするのも後にも先にもこれが最後だ。いつまでこの鉢植えを育てるのだろうか。春が来るまで？ 花が咲くまで？ 飽きるまで？

（嫌なものを口にするように）・・・帰ってくるまで？」

男1「1月22日 今朝、水を与えようと思ったとき、枯らしてしまおうかと、思った。考えてみれば。考えてみるまでもなく、別に育てる義務なんてない。彼女の鉢植えだ。何も僕が育てる必要なんかないだろう。

そう、どこにもない。こんなこと、僕がしなくてもいい。何の未練だ？ 未練か？ 未練があるのか？ 特別じゃない。彼女との関係は別に特別なものじゃなかった。ただ、一緒に住んでいただけだ。恋人。恋人なんてよくある言葉だ。別に、すぐに作れるものだ。特別なモノなんかじゃないから。ただ、お互いがお互いのことを普通の付き合いよりもたままた深い仲になったというだけの話だ。なにも、なんにも、気にするようなことじゃない。

だから、そうさ。枯らしてしまおう。このまま、彼女のこと、忘れるさ。そういう関係なんだ。それだけだ」

嬉しそうな様子の男2・

男2「1月22日 今日、植物に水を与える。どこか嬉しそうに見えるのは僕の気のせいなのだろうか。見えるのは気のせいであつたとしても、植物にとっては嬉しいことであるはずだ。証拠に、また少し枝葉が伸びた。花が咲くまで育てようと思う。じっくりと、焦ることなく育てよう。どんな花が咲くのだろうか。蕾も少し大きくなっている。葉の間で窮屈そうだ。これ以上葉が伸びるようならいくらか手入れした方がいいかもしれない。鉢を入れるのは少しかわいそうだが」

どんよりとした顔の男1・

男1「1月26日 何日か世話をしなかった。けれど、葉は萎れる様子がない。水気がなくなる様子がない。気持ち悪いほど青々と、している。尖った葉は、折れることなく、僕を指さしているように見える。目玉のような蕾は角度を変えて、僕をじつと見つめているように見える。細い茎が、彼女の細い指を思い起こさせる。責められている。僕は、この植物に責められている。水を与えない僕を責めたてている。葉が彼女の手に見えた。蕾が彼女の顔に見えた。この植物は僕を責めている。・・・

仕事に出ることにする。静かな部屋に、あんな植物と二人きりなんて・・・二人きり？

ふふ。捨ててしまおう。枯れないのなら。捨ててしまえばいい。あんな気持ちの悪いものなんて、捨ててしまえ」

何か考え込む様子の男2・

男2「1月26日・・・未練なのかもしれない。気持ち、彼女に残っている。もう、二週間ほど経つ。

最後に出かけたのはいつだったか。

クリスマスにクリスマスツリーとイルミネーションを見に行った。あれが最後だ。プレゼントをした。彼女は喜んでくれた・・・はずだ。顔が、思い出せない。どんな言葉を、交わしたっけ・・・？ 思い出せない。

尖った葉が、僕に向いている。

(やや沈黙)・・・思い出せないのは、思い出すのが辛いからだろうか。それとも、僕

自身僕が思っているよりも、彼女がいなくなってしまうことに対して悲しいと感じていて、だから、そういう、思い出を、自分で思い出せないようにしているだけなのかもしれない。

・・・いや、そう・・・。

そう・・・きつとそういうことに、違いないのだ。僕は悲しくて、別れようとか、出て行くとか、そういったわかりやすい、決まり事みたいな文言もなかったものだから、きっかけが掴めなくて。きっかけがつかめないまま、にいて。いる。僕は、僕が感じていた以上に、彼女のことを気に入っていたし、好きだった。だから、プレゼントは、指輪にした。婚約指輪。受け取って、彼女は喜んでくれた。嬉しいと言ってくれた。そう、そうだ。言ってくれた。なんだ、ちゃんと覚えてるじゃないか。でも、彼女の顔が思い出せない。あの時の顔が、思い出せない。

・・・なんで、思い出せないんだろう。どんな、顔だったっけ・・・。
薔が、少し揺れたのは、僕の気のせいだろう」

凍える男1。

男1「2月7日 寒い。誰もいない。慣れない。もう、一月近くになるのに、まだ、慣れないのか。

エアコンの電源を入れる。暖かい風が冷気を追いやりきるまでに、シャワーを浴びる。お湯を浴びても、寒いと感じる。食事を取らず、リビングの椅子に座る。部屋は暖かい。けれど、寒気が収まらない。どこから、風を感じる。隙間風みたいな、うっとおしい風だ。

誰もいない。慣れない。誰もいない。慣れない。慣れない。

(振り返る)・・・！

何か物音がするたびに、いちいち反応してしまう。そんな自分にひどく嫌悪感を感じる。

はつきりと覚えている。声とか、足音とか。食器を洗う音とか。そんなことを、ひどく覚えている。顔が、消えない。忘れられない。

そんなに、好きだったのだろうか。僕は、彼女のことが。そんなことがあるか。彼女は、ただ、少し気に入っていただけ。それだけ、それだけのはずだ。・・・はずだった。

好きで、一緒に居てくれるのが嬉しかった・・・？ 嬉しかった？ 違う。違う！彼女とは利害が一致していただけ。彼女も僕も、将来のことを考えるような間柄じゃなかった。少なくとも、僕はそう感じていたし、僕がそう感じるということは彼女もそう考えていたはずだ。そうだ、そういうことなんだ。

だけど、彼女はいなくなつた。利害がいつの間にかずれていたんだ。ずれていたの

に、自分で気が付けなかった。それだけだ。それだけのことだ。簡単だ簡単な話だ。それだけの話なんだ。

・・・最後に出かけたのは、クリスマスだった。僕は、プレゼントを、渡せなかった。

・・・せめて、植木鉢だけでも残っちゃいないだろうか。清掃員が、残しているかもしれない。せめて、あれだけでも、残ってはいないだろうか。せめて・・・」

立ち上がる男1。

どこか喜んでいる男2。

男2「2月7日 彼女がいなくなってから、もう一か月近くになる。同時に、僕とこの子との生活もひと月を迎える。

毎日を与え、栄養剤も加えて、日当りのいいところに置いた。蕾は大きくなっていく。まるで、僕の悲しいという気持ちを吸い上げるようにして、蕾は膨らんでいく。蕾が育てば、育つほど、僕は彼女のことを忘れていくような気がする。実際、そうなのだろう。僕の気持ちはこの子を育てることで、ぼやけていく。思い出そうとしていたはずなのに、忘れていく。

僕たちは、どんな言葉を交わしたんだっけ？ 思い出せないのは、きっと、それほど大したことじゃなかったはずだ。それとも、とても大事なことで、今は忘れていくだけで、例えば何かのきっかけで、例えば、この蕾が咲いたときに、思い出せるのだろうか。

・・・どっちでもいい。ただ、この子があれば、僕は満足なのだろう。それだけで、十分なのだ、きっと。

特別なこの子が居てくれれば、僕はもう、それだけでいいのかもしれない。だとしたら、彼女の別れのプレゼントはプレゼントとしてとてもいい役割を果たしたことになる。

だったら、もう、彼女の顔が思い出せないのも、そもそも、この部屋に本当に彼女がいたのかどうかさえも思い出せなくなってきた僕にあやふやな記憶も、許してもらえそうな気がする。この子が、許してくれる。もう、彼女は絶対に帰ってこないんだと、思う。特別な人は、彼女ではなくなったから。この子が僕にとっての特別になった。

そう、むしろ、最初から、この子だけしかいなかったんじゃないか？」

テーブルに突っ伏している男1。

男1「・・・2月10日 どこにでも彼女がいると感じる。どこにでも彼女がいる。植木

鉢はなかった。どこにもなかった。

・・・捨てるんじゃないかった。せめて、あの鉢植えさえあったなら、と、何度も考えた。自己嫌悪。鉢植えを捨てたのは僕で、捨てた気持ちを抱いたのも僕で、彼女が僕を置き去りにしたのも、きつと、僕のせいで。全部、僕は・・・僕のせいで。

・・・ひどい気分の日が続く。

あの鉢植えは、花を咲かすのだろうか。それは、どんな色なんだろうか。いつ咲くんだろうか。冬に咲くんだろうか。それとも、春に咲くのか？

わからない。ただ、彼女の顔が忘れられない。声が忘れられない。

・・・畜生」

男1、指輪を投げ捨てる。

鉢植えに花が咲く。

男2 「2月14日 彼女に花が咲いた。

ねえ・・・花が咲いたね。とても綺麗な、青い花が咲いた。ふふふ。咲いた。バレンティンデーに咲かすなんて、ロマンチックだね。君は、この日を狙って花を咲かせたの？ だとしたら、とても素敵なプレゼントだ」

青い花が育っていく。

男2 「2月18日 花はすくすくと育っていく。覆っていた葉の間で、とても狭苦しそうに、身をよじらせているように見える。とても窮屈そうで、僕はあんまり可哀そうな気持ちになってしまつて。だって、周りにある葉っぱは、針葉樹のように尖つていて、そんな尖った葉の間で大きくなってしまつては、花卉が傷ついてしまう。と。思ったから、僕はキッチンバサミを持ってきて、ほとんどの葉っぱを切り落とした。すっかり君はさっぱりしたね。

綺麗というよりも、可愛らしいというニュアンスの方がびつたりだ」

男2 「2月23日 花だけになった鉢植え。葉っぱの奥にある茎は思いの外細かったように、君は首を傾げているように見える。少し、首を傾げた君は、何かに困った様子に見えて、きつと少し寒いのもかもしれない。今年の2月はとても寒い。だから僕は君の頬に少し触れる。君の花弁の感触が手の平に伝わる。ほら、こんなにも冷たい。部屋を暖めようか・・・いや、この方が彼女の体温を感じられる。冷たい彼女の頬は僕の肌で温めればいい。あつたかい？ 僕の手は？

・・・そう。それはよかった」

男2 「2月28日 冬は長い。長く続く。けれど、冷たい彼女の花弁があれば、僕は僕の肌が暖かいのだと感ずることが出来る。僕の体温が暖かいと感ずられるのは彼女がここにいてくれるからで。冬が続かないと彼女はここにいられないのだろうと思う。冬に咲いてくれてありがとう。君がここにいるから僕は君のことを感ずられて、僕は君のことを感ずられるんだよ。わかるかな。だから、なんにも気にしないでただ咲き続けて。寒い冬は僕がいるから暖かいんだ。

彼女の花弁はどんどん大きくなる。茎はいくらか太くなって、もう、困ったような顔はしていない。しっかりと上を向いて花弁を大きく開いている。もう、植木鉢が小さくなってきているような感ずだ。もう少ししたら、新しいものに取り換えた方がいいかもしれない。でも、そうやって窮屈なところにいる君を見ているのも僕はずいぶん好きなんだろうと思うよ。それに、こんなに寒いんだ、それぐらいの大きさの植木鉢に収まっていた方が、暖かいかもしれない。冬はまだ続くんだ」

男2 「2月31日 毎日、雪が降りだしそうなどんよりとした天気が続く。僕は日がな一日君のそばにいる。君の傍で、君の頬に触れる。触れ続ける」

男2 「2月38日 毎日、雪が降りだしそうなどんよりとした天気が続く。そう、確か去年のクリスマスもこんな天気だったように思う。ホワイトクリスマスになりそうではなかったんだ。それを君と残念がったね。覚えてるかい？

彼女は何も言わない。何も言わないで、ただ、花弁を広げている。

彼女に語り掛けても、彼女は何も言わない。いつも、僕が一人でしゃべり続けているだけだ。

ねえ、どうして？ なんで、何も言わないの？ 寒いなら寒いと言えればいい。そうしたらこうして、君の頬に触れ続けなくてもいい。暖房を入れることだって考えるのに。寒い？ 寒くないの？ 僕は寒いよ。凍えてしまいそうだ。なんで何も言わないの？ 君の意思はどこにあるの？

彼女は何も言わない。青い花弁は、青いままだ」

男2 「2月46日 相変わらず、彼女はだんまりを決め込んでいる。黙ったままで、ただ咲いている。何か言ってほしいと思う。言葉を聞きたい。彼女の言葉を。なんであの時、僕の元を離れていったのか。その理由を尋ねたい。何か気に障るようなことをしたのだろうか？ 少なくとも今は、彼女の態度が僕の気に障るのは事実だ。試しに、何も言わない彼女の花弁を一枚筆記取ってみた。けれど、彼女は痛がるそぶりも見せなかった。植物なのだから当然なのだけれど、そんなのって、ずるいと思う。植物だとしても、僕のことは気にかけてくれなきゃ、気にし合うからこ

そ一緒に住んでいることに嫌なことが減るんじゃないか。君のしていることはただの嫌がらせだよ？ わかる？ わかっている？」

男2、鉢植えを持ちあげて、床にたたきつける。

男2「植木鉢が割れて、彼女の根っこが露わになる。ほら、ずっと黙ったままだから、そんなことになるんだ。ねえ、何か言って。あの時いなくなった理由を聞かせて、あるいは、そんなの気にならなくなるぐらい、君の意思を聞かせて、僕と一緒にいたいという意思。ね」

ひどい顔の男1。

男1「2月14日 去年のバレンタインにもらった彼女のチョコレートはひどい味だった。市販のチョコレートを溶かして作ったはずなのに、なんであんな味になるのかわからなかった。けれど、食べた。うん。美味しいって言いながら、食べた。味なんか関係なかったんだ。チョコレートがどんな味であっても彼女が僕に作ってくれた言うことが嬉しかった。

・・・ああ。でも、あの時も、僕は嬉しいと言わなかった。美味しいと本当に言ったのだろうか。言った気になっているだけなのかもしれない。彼女がいることが当たり前で、当たり前のことに甘えていただけなのかもしれない。いいや。事実、甘えていたんだ。言葉なんて要らないと思ってた。でも、言葉なんて言葉でしかないだろう？ どんなに積み重ねたって、言葉は、言葉だ。

・・・冬が長く感じる。どこまでも寒いと感じる。春なんて来ないんじゃないかと思う。ずいぶんと、寒い・・・」

男2「2月62日 彼女の態度から反省が見て取れたから、僕は許すことにした。新しい

植木鉢に彼女を入れた。

花の間から生えてきた、可愛い、指」

男2「2月73日 水をあげると、指はすくすくと育った。彼女の指は僕の言葉に反応して、左右に揺れる。彼女は花卉のちょうど、真ん中あたりから顔・・・じゃない。指を伸ばしている。中指の第一関節と、人差し指の頭が見える」

男2「2月83日 彼女は手のひらまで、育つ。左手だ。爪の形がほっそりとしていて美しい。手の平の細かなしわに触れる。彼女はくすぐったそうにする」

男2 「2月8日 彼女は一本の手が生えた。ほら。こんなにも綺麗な手だ。青い花卉の間から、きれいな手が生えてきた。

僕は彼女の意思がわかる。何が言いたいのかすぐにわかる。僕は彼女の手を握る。

寒い？ 彼女は手を握り返す。

寂しい？ 彼女は手を握り返す。

一緒にいるよ。彼女は手を握り返す。

(男2 細く笑う)

手を握るといふのはとても素敵なことだ。一番相手のことがわかる。僕が君のことが好きで、君が僕のことを好きで、だから僕たちは一緒に暮らしている。そういう、当たり前のことがとても大事だと思うんだ。一緒に居ることが大事なんだと、僕は思うんだよ。

そうだ、プレゼントをあげよう。覚えてるかな？ クリスマスに僕がプレゼントした指輪を、プレゼントしてあげるね」

男2、指輪を取り出す。

男1、指輪を持っている。

男1 「クリスマスプレゼントは渡せなかった。渡せなかったんだ。渡せていたら、何か違ったのだろうか。面倒だと思わないで。じゃあ、なんで買ったんだ……。面倒だったら、本当に面倒だと思っていたなら、わざわざ買うことなんてなかったじゃないか……。

渡せていたら、何か変わったんだろうか。変わったのか？ 本当に？

あの植木鉢を育てていればよかったんだろうか？ 寂しくないようにと彼女が置いていったであろう植木鉢を育てていれば。でも、ダメだ。そんなことしたところで、いっそう彼女のことを思い出すだけで。なんにもならない。

そもそも、こんな指輪を持っているのが良くない。こんなものをいつまでも持っているから、忘れられないんだ。

……。忘れたくない。ずっと、一緒に居てほしかった……。」

男2 「ほら、この指輪を、君にプレゼントしてあげるよ」

男、自分の左手に指輪をはめる。

男2 「自分の左手を見ながらほほ笑む」 ほら、こんなにぴったりだ。当たり前だよ。あの時、君にプレゼントして、ぴったりだったんだ。ぴったりじゃないはずがないものね。よく似合う。よかった。

ねえ、僕とずっと一緒にいてほしい」

驚いている男1。

男1「2月15日 朝起きると、僕の左の薬指に、指輪があった。あの時渡すことのできなかった、指輪の、僕の、指輪が、なんで・・・？」

寝ぼけていたにしたってたちが悪すぎる。僕は指輪を外した

・・・ずっと曇り空だ。雪は、いつ降るんだろう？」

男2「彼女が指輪を外していた。それは悲しいことだ。とても悲しい。一緒に居たいという僕の気持ちが裏切られたと思った。でも、こういうのは根気が勝負だと思う。だから、僕はもう一度、指輪をしてあげた。

（指輪をはめる）

・・・爪が伸びているよ？ ほら、僕が切ってあげる。一人じゃ、できないだろう？」

男2、自分の爪を鋏で切る。が、あやまって、深く指を切ってしまう。

男2「ああ、ごめん。少し指を切っちゃった。血が出てしまったよ。でも、きれいだね。

花びらと同じ、青い血だ」

男1の指が血に染まっている。

男1「2月16日 朝起きると、左手の薬指の先端が欠けていた。何かで切り取られたみたいに・・・。シャツが真っ赤で、結構な出血をしていて。僕は慌てて包帯を巻いた。

（自分の左手を見る）・・・なんだ・・・？

（指輪を付けていることに気が付く）また、指輪をしている。包帯が邪魔で取ることが出来ない。寒気が、する」

鋏を手にする男2。

男2「2月103日 毎日毎日、僕は彼女の爪を切ってあげる。伸びるのが早い。その分、僕は君の世話ができるからいいのだけれど。間違えて指を切ってから、彼女は反省したみたいに指輪をしている。でも、本当は僕のことが好きなんだろう？

新しく生えてきた葉っぱを切り揃えて、飛び出して寝ぐせみたいになっている花びらを整えて、爪をきれいにする。ほら、こんなに、さっぱりした。

たっぷりとした水を与えながら、僕は朝食を食べる。一緒にご飯を食べるのは美味

しいね。君と一緒に居ることが大切なんだ。君の、言うとおりだね。
今日も、寒いけれど、いい天気だよ。日当りのいい場所に君を置いて、僕は仕事に出かける。早く帰ってくるよ。待っていてね」

男1の左腕全体が血まみれである。

男1「朝になるたびに、左腕に新しい傷が増えていく。不思議と、痛みがない。なんで痛くないのか分からない。けれど、確かに血は流れていて、だから包帯を取ることが出来ないでいる。だから、いつまで経っても、指輪が取れない。

・・・なんだ・・・？

なんで、僕は指輪をしているんだ・・・？　なんだよこれ。なんだよこれ！！！！
こんなのは、嫌だ。こんなふうにこの指輪を付けたくない。この指輪は、僕が彼女とずっと一緒に居るために――」

男2「僕がプレゼントしたんだ」

男1「できなかった」

男2「これですっと一緒に居られる。いや、君はずっとここに居たんだ」

男1「できなかったから、彼女は居なくなつた。居ないのに、彼女のことが忘れられない。いつまで経っても」

男2「君がどんな顔をしていたかなんてもう、どうでもいい。君さえ居てくれればそれでいい。指輪のある君の手が素敵だよ」

男1「指輪だけあつたつてしょうがないじゃないか。こんなもの、僕だけが付けてどうするんだ」

男2「今年のクリスマスはどこに行こうね。手を繋いで歩こう。きっと楽しい。雪が降るといいね。ホワイトクリスマスなんて、ロマンチックだね」

男1「いつまでも曇りの空が続く。晴れた空を見ていない。青い空を見ていない。寒い日が続く」

男2「君が居ると、寒い日もずっと暖かく感じる。冬は長いね。でも、冬が終わらなければ、僕ははずっと君の手を握っていられる。そうだろう？」

男1「傷が増える。血が流れる」

男2「君の傷が増えても、僕は何も傷つかない」

男1「握った手の感触が消えない」

男2「だから僕はずっと君の手を握る」

男1「握った手はどこにもない」

男2「いつも、一緒だよ。」

・・・ねえ、そうだろう？」

男1、何事かを、決意する。

男1「いいや、違う」

男1、鉄を自分の左手に向けて、振りかぶる。

暗転。

明転。

血だらけになっている男の左手。

右手に、指輪を持っている。

窓の外を見る、男。

男「やつと、雪が降った」

男、指輪を捨てる。

男「・・・めんどくせえ」

終